

令和元年6月13日現在

機関番号：37604

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2015～2018

課題番号：15K13216

研究課題名（和文）日本発アイドル養成と中国青少年の主体形成に関する実証的研究

研究課題名（英文）An empirical study of Japanese-style idol training group and self-formation

研究代表者

登坂 学（TOSAKA, MANABU）

九州保健福祉大学・保健科学部・准教授

研究者番号：50308144

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は「クール・ジャパン」の一翼を担う養成型アイドル団体に注目し、その受容・消費者である中国の若者たちへの影響をSNH48を事例として微視的・実証的に研究した。申請者の関心は商業活動としての運営ノウハウよりも寧ろアイドルを志願し修練する若者自身やそれを応援するファンの主体形成にある。その意味で本研究はオーソドックスな民間教育研究、広義の社会教育実践研究ということも可能である。ウェブ文献の読解及びフィールド調査を通じて、日本発の養成型アイドル団体の持つインフォーマル教育的意義、民族・文化の違いやイデオロギーに関わりなく若者の共感を育む価値観の創出、国際共生実現の一つのヒント等が見出された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的・社会的意義は、我が国由来の育成型アイドルグループの中国における展開が現地の中国の若者に対してどのような影響を与えうるかを、インフォーマル教育の論理的枠組みを用いて参与観察を通じて検証・分析し、その可能性について考察した点にある。

観察対象は主にそこで活動するアイドル自身とそれを応援するファンコミュニティ及びファン個人であるが、いずれの側にもアイデンティティの拠り所としての「居場所」意識の醸成及び自己肯定感の発揚が確認できた。立場こそ違つが、ごく普通の若者が連帯することによる等身大の共感と自己形成、これこそが我が国若者文化がもたらした積極的意義であると考えられる。

研究成果の概要（英文）： The purpose of this research is to consider to the cultural influence of globalized entertainment. Using the example of Japanese-style idol training groups that have expanded into China and the activities of their fan communities, attention is placed on the non-formal education (learning) and informal education (learning) aspects of their activities, which are the key points of this study. For this purpose, The authors have been gathering data and observing participants in Shanghai for a number of years.

Through the several series of processes, an awareness may be reached that becoming an idol and being a fan of an idol, which is an activity that can be viewed at a glance as simply a “leisure-time activity for geeks,” actually has a social activity aspect that promotes self-development, and has significance in terms of lifelong learning.

研究分野：社会教育学、生涯学習論、中国地域研究

キーワード：インフォーマル教育 共感 自己肯定感 居場所 アイデンティティ 育成型アイドルグループ ファン コミュニティ 参与観察

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

数年来、申請者は産官一体となった「クール・ジャパン」戦略に注目してきた。その過程では担当大臣が任命され、「クール・ジャパン推進機構」と称する半官半民の企業が設立されるなど、大きな潮流が起こった。その実、研究教育の分野もこれと無縁ではなかった。全国の大学にクール・ジャパンと連動する学科・コースが設置されていったのである。そもそもクール・ジャパンの狙いは「内需減少等の厳しい経済環境下で、自動車、家電・電子機器等の従来型産業に加え、『衣』『食』『住』やコンテンツ(アニメ、ドラマ、音楽等)をはじめ、日本の文化やライフスタイルの魅力を付加価値に変え(「日本の魅力」の事業展開)、新興国等の旺盛な海外需要を獲得し、日本の経済成長(雇用創出・地域の活性化等)につなげる」ことである(出典:平成25年6月、通商産業省資料)。つまり、文化輸出による日本経済の活性化がその核心に据えられているのである。しかし、申請者が注目するのは、むしろ個人の内面に根差した部分であり、アイドルを志願し懸命に修練する若者たちや、それを応援するファンの自己形成過程である。本論は芸能活動への関わりを通じた自己形成論なのであり、その意味では典型的な社会教育事例研究に準ずるといえる。

2. 研究の目的

本研究は、「クール・ジャパン」の一翼を担う「アイドル業界」に注目し、その受容・消費国の一つである中国社会における影響を、アイドル集団 SNH48 を具体事例として微視的・実証的に分析することを目的とする。筆者の主要問題意識は商業活動としてのアイドル集団の輸出や営業活動のプロセス及び経営・運営にあるのではなく、アイドルを志願し懸命に修練する少女たちや、それを応援するファンの成長過程にある。つまり芸能活動への関わりを通じて自己形成する中国青少年が本研究の主人公である。そこから、日本発アイドル集団及び養成システムの持つ社会教育的意義、民族的差異やイデオロギーに関わりなく人々の共感を育む芸能の持つヒューマニティ、21世紀における国際共生実現の一つのヒント、等を見出すのが本研究の目的である。

そのため本研究においては、研究期間内に、一連の微視的な実証研究を通じて、次の諸点を明らかにする。すなわち、(a)日本発アイドル集団及び養成システムの持つ社会教育的意義、(b)民族的文化的差異やイデオロギーに関わりなく人々の共感と連帯を育む大衆芸能の持つヒューマニティ(人間性)以上に立脚し(c)21世紀における国際共生のための芸能を用いた仮説的モデルの構築を目指すことである。研究の方法論としては、(ア)公式・非公式の映像メディアの分析、(イ)公式・非公式の活字メディアの分析、(ウ)ウェブコンテンツ(公式ウェブサイト、メンバーブログ、ファンブログ等)の分析、(エ)フィールドワークによるアイドル・ファン・その他関係者に対する聴き取り等が挙げられる。

申請者が注目するのは、アイドルを志願し懸命に修練する少女たちや、それを応援するファンの自己形成過程である。本論は芸能活動への関わりを通じた自己形成論なのであり、その意味では典型的な社会教育事例研究に準ずるといえる。本研究においては、期間(3年)内に、一連の微視的な実証研究を通じて、次の諸点を明らかにする。すなわち、(a)日本発アイドル集団及び養成システムの持つ社会教育的意義、(b)民族的文化的差異やイデオロギーに関わりなく人々の共感と連帯を育む大衆芸能の持つヒューマニティ(人間性)以上に立脚し(c)21世紀における国際共生のための芸能を用いた仮説的モデルの構築を目指すことである。研究の方法論としては、(ア)公式・非公式の映像メディアの分析、(イ)公式・非公式の活字メディアの分析、(ウ)ウェブコンテンツ(公式ウェブサイト、メンバーブログ、ファンブログ等)の分析、(エ)フィールドワークによるアイドル・ファン・その他関係者に対する聴き取りやアンケート調査、が挙げられる。

本研究の学術的な特色及び予想される結果と意義としては以下の点が挙げられた。まず前者については、SNH48の先輩グループであるAKB48については、その内情や養成システム、ビジネス方法論等に関する多数の活字資料(学術研究書も含め)及び映像資料がすでに多数発行されている。その言説によれば、「アイドルグループ」「AKB劇場」という一見すれば軽佻浮薄と見られがちな「場」が、その実、正規の学校教育以上に強い人格涵養機能を有している。修練を通じてメンバーが自己形成し、それを見守るファンも同様に成長していくのである。このシステムが中国社会において機能する過程を検証することで文化共生的人材養成モデルが構築できる点である。後者については、研究を通じて、中国青少年が硬直化したイデオロギーや歴史観を超克し、自由にそして柔軟に自己表現している姿、しなやかに自己の理想を追求する姿を数多く描き出せると考えられる点である。国家のイデオロギーやそれに依拠する理想的人間像という足枷を超克する主体性や自己決定のあり方、その未来への可能性を芸能活動に求め証明できる点にある。

3. 研究の方法

ほぼ当初の計画に従って行った。初年度においては、ウェブベースでの情報収集が主であり、現地調査は従であった。政府当局の芸能・興行等関連政策及の情報収集、インターネットコンテンツ 運営会社公式サイト及びSNS(ブログ、中国版ツイッター等)、メンバー公式サイト(ブログ、中国版ツイッター)、ファンサイト(ブログ、中国版ツイッター等)を縦覧し、企画段階からメンバー募集、グループ成立、専用劇場竣工までの軌跡を時系列で正確に記述し

ていった。次年度から三年目においてはフィールドワークが主となり、ウェブコンテンツ及びメディア分析は従となった。フィールドワークは積極的に実施し、経済先進地域都市である上海市を中心に、聴き取りやアンケート調査等を行い、ファンコミュニティを中心に青少年の声を質的に掬い取るなかから自己形成の記録を紡いでいった。

4. 研究成果

本研究テーマの主要な研究成果は、発表済みの論文数稿に概ね示されている。それを要約して記述しよう。

(1) 第一稿は「中国における日本大衆文化の受容と可能性に関する一考察」と題し、以下の諸点を明らかにした。第1に、エンターテインメントを送り出す日本側の思惑及び現状についてである。第2に、それを受け入れる中国側の思惑及び現状についてである。以上により、日本側と中国側の考え方の類似点・相違点が明確になった。第3に、具体事例として上海に発足したSNH48の取り上げ、その運営管理体制やアイドル養成制度に言及し、更には特定メンバーの入団以来の発話を分析する中から、メンバーがどのような主体形成と成長を遂げたのかを検証した。アイドルグループの活動は、マクロの視点から見れば、日中双方の産業活性化という商業的思惑の枠組みの中で進捗している活動である。しかしながらミクロの視点、つまり個人レベルで検証していくと、利潤追求のために国家や国境を超える商業主義とは明らかに違う性格の、若者の夢とその実現への純粋な欲求を見出すことができ、大人の側の商業活動はむしろそれに支えられている部分が大であることが明らかとなった。個性派ぞろいのメンバーを抱える育成系アイドルグループであるが、寝食を共にし、集団でのレッスンや公演、イベント参加や取材等を繰り返すなかで自己形成が進み主体性が磨かれていく。これはまさに社会教育研究において検証されている幾多の若者集団が有するインタラクション及び主体形成と共通する部分なのであり、評価されるべきインフォーマル教育の機能なのである。

(2) 次に、第二稿においては、「中国青少年にとっての日本型アイドル養成団体の意味及び関係性に関する一考察」と題し、以下の諸点を明らかにした。第1に、中国社会及び大人社会がアイドルをどのようにとらえているか、つまり大人社会の側が青少年世代をみる眼差しがどうかを明らかにした。第2に、真逆の視点、つまり実際にアイドル文化を受容し楽しむ青少年がアイドルをどのような眼差しで見ておりどのように関わろうとしているか、そこでどのようなインタラクション及び相互作用が起こっているかを明らかにした。これにより、「アイドルにどのように向き合うか」という問題を大人社会と青少年コミュニティの間のジェネレーションギャップ、また世代間の文化的・道徳的矛盾として捉え直すことができる。それは同時に、我が国政府が政策レベルで重要な輸出商品として意識するかしないかに関わらず中国に流通し消費される若者大衆文化およびその精神的浸透が社会とどのような緊張関係を生ぜしめるかとの重要論点と繋がるのみならず、青少年間のインタラクションの可能性を有するものとしてどのようなノンフォーマル教育的意義を持つかという論点にも繋がっていった。この対比により、青少年の側は大人社会の側の憂慮や抑制を超克した異なる次元で、アイドル文化を通じたインタラクションと自己形成を進めていることが明らかとなった。ファンにとって同時代を生きる等身大のアイドルとは、自分がこうありたいと願う理想の姿でもある。それと同時に、弱さや欠点を持つ自分自身の生き写しでもあり、更にはファンの支えがなければ羽ばたくことのできない雛鳥でもある。若者の側には爆発的なチャレンジ性と自己実現への欲求及び実行力がある。これらはアイドル養成団体に所属するメンバーの体験に耳を傾けることで更に明確なものとなった。これが3点目である。ファンの側からすればアイドルの追っかけ(ヲタ活動)とは自己の居場所を確保しアイデンティティを確認する行為でもあるのだ。劇場公演やコンサートのチケットを欠かさず購入してメンバーの歌やダンスを鑑賞し声援を送ること。執念グッズや握手券、総選挙の投票券が入ったCDを大量購入して特定メンバーの人気を支えること。握手会や誕生会等様々な行事を通じてアイドルに直接声をかけること。ブログへの書き込みを通じてアイドルと、そしてファン相互の忌憚ない意見交換をすること。これらはみなインタラクションを実現し、そこから互いに成長していく可能性を有する行動であるとも解釈できる。そうであればそこには一定のインフォーマル教育的意義も見いだせるのであり、社会教育的意義を有することにもなるのである。

(3) 更に、第三稿においては、「日本型アイドル養成団体の需要・現地化とファンコミュニティのインフォーマル学習的意義について」と題し、ファンコミュニティの側に比重を置いて以下の諸点を明らかにした。第1節では本研究のフレームワークとなるノンフォーマル教育(学習)及びインフォーマル教育(学習)の概念を整理し、なぜその考え方がアイドルグループの活動やそのファンコミュニティにも援用できるのかを論じた。第2節では、応援会活動の詳細な検証を通じて、そこに相当高度な社会性を見出すことができた。第3節では応援会を構成する二人のファンへのインタビューを通して、アイドル(グループ)との関わりを通じた自己形成の在り様を検証した。言い換えれば、これこそがインフォーマルな教育であり学習なのである。

中国は日本とは比べ物にならないほど苛酷な受験戦争があり、そのレールに乗ることができ

なかつたりドロップアウトしたりした若者の中には厳しい現実が待ち構えている。大学を卒業できても実社会へ出れば厳しい生存競争が待っている。そこで自己肯定感の喪失やアイデンティティの拡散に悩む若者も多い。中国青少年にとって日本発アイドル文化に関わるとは、ある意味でボランティアの顕現である。自分の応援活動や募金・寄付の活動への参加、そして投票による特定アイドルへの応援。それによって喜ぶメンバーや仲間のファンの姿を見ることがファン自らの自己肯定感を高め、成長させるのである。

以上の論考により、我が国由来の育成型アイドル団体（アイドル養成団体）は中国後において受容・継承され、独自の発展を見ており、その持つインフォーマル教育的機能も発揮されていることが検証された。これら若者文化は多文化・他民族を繋ぐ共通のリソースとなり得ると考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 3 件)

登坂学、日本型アイドル養成団体の受容・現地化とファンコミュニティのインフォーマル教育的意義について 上海における参与観察を中心に、九州保健福祉大学研究紀要、第20号、2019年、45-56ページ

登坂学、中国青少年にとっての日本型アイドル養成団体の意味及び関係性に関する一考察、九州保健福祉大学研究紀要、査読無し、第17号、2016年、49-58ページ
https://phoenix.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=871&item_no=1&page_id=13&block_id=42

登坂学、中国における日本大衆文化の受容と可能性に関する一考察 アイドルグループの誕生と成長をめぐって、九州保健福祉大学研究紀要、査読無し、第16号、2015年、77-87ページ
https://phoenix.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=961&item_no=1&page_id=13&block_id=42

〔学会発表〕(計 1 件)

登坂学、中国における育成型アイドル団体とファンコミュニティに関する一考察、日本現代中国学会（西日本部会）2017年
http://www.genchugakkai.com/archive/newsletter/jamcs_n_52.pdf

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。